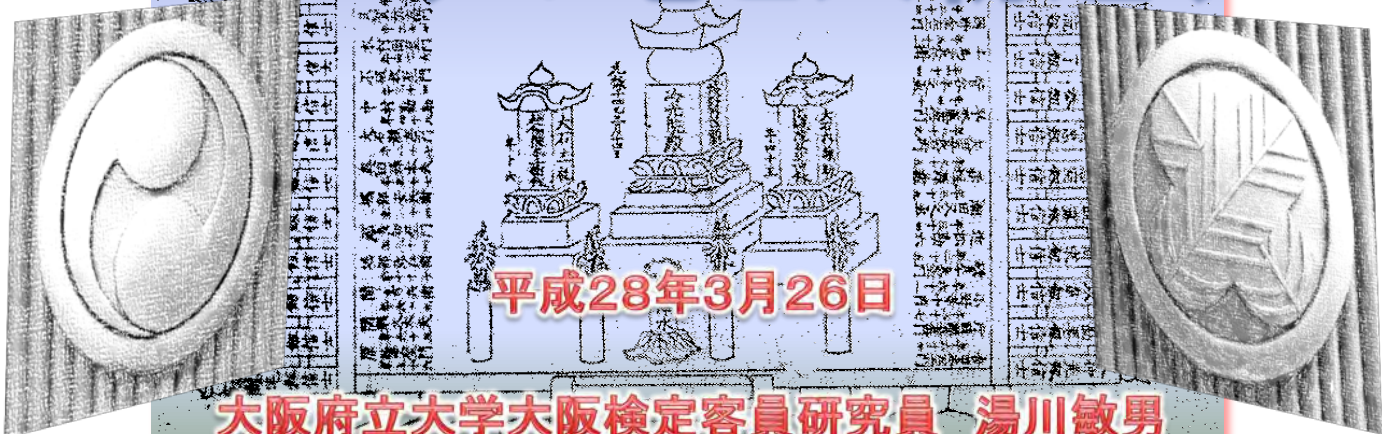


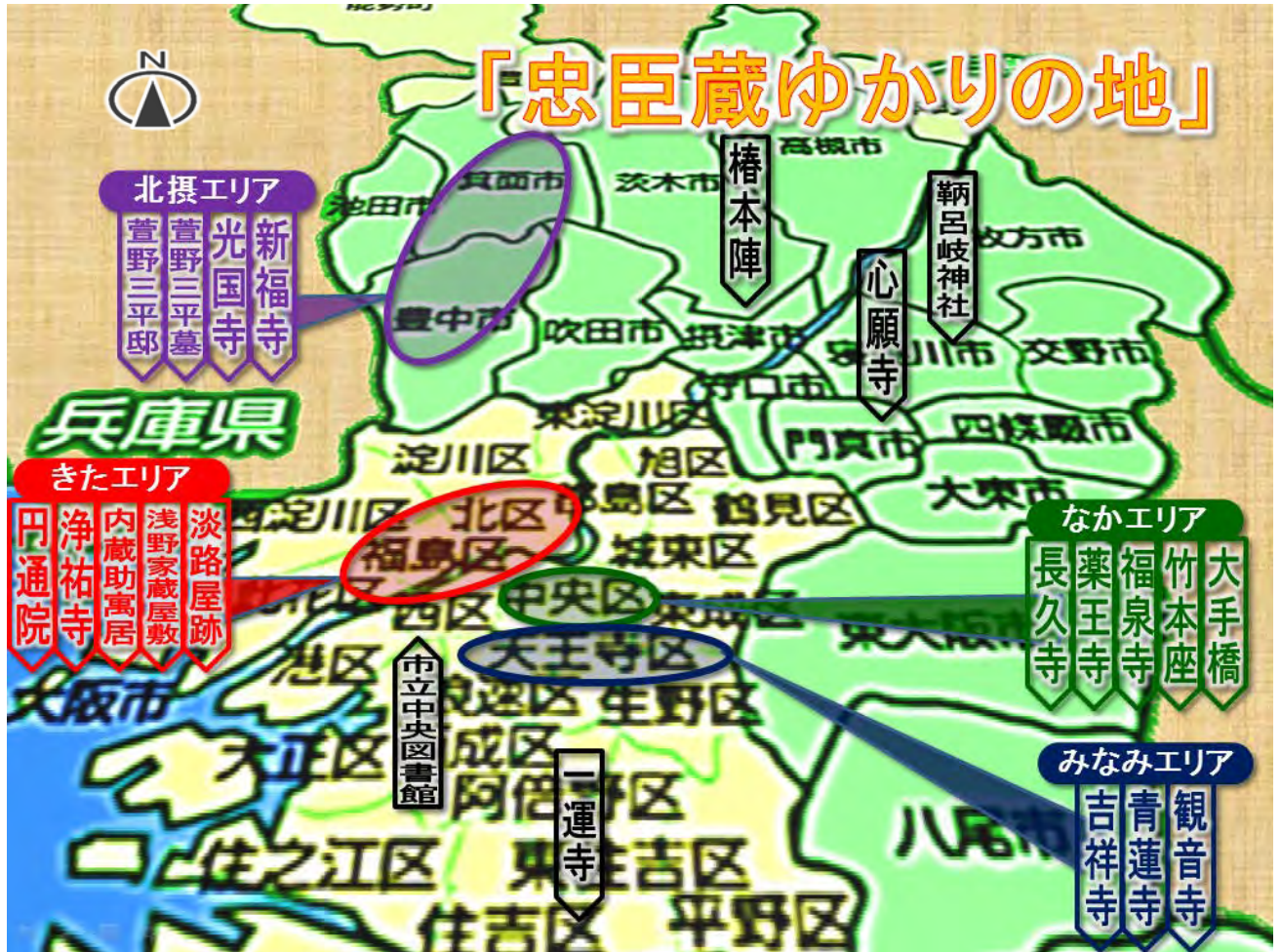
別冊

忠臣蔵番外編「大坂の段」

ゆかりの地と人物巡り



戦前の吉祥寺の四十七士の墓所配置 (郷土研究「上方」より)





【忠臣蔵番外編「大坂の段」……忠臣蔵ゆかりの地】



No.	エリア名	史跡名	忠臣蔵ゆかりの地概要	場所
1	北摂 エリア	記念館「涓泉亭」 (萱野三平旧邸)	萱野三平旧邸を記念館にしたもの。遺品の俳文集と刀がある。元義士三平は赤穂改易の後父の許に帰り、1702年(元禄15年)正月14日(長矩の月命日)旧宅長屋門で自刃した。	箕面市萱野 3-10-4
2		芝東西坊島墓地 (萱野三平墓)	墓地の一隅に志半ばで自刃した準義士萱野三平及び一族の墓がある。	箕面市萱野 5丁目
3		光国寺 (萱野三平墓)	準義士萱野三平の墓と辞世の句『晴れゆくや 日ころ心の花曇り』が彫られた「萱野三平之碑」(当時の大阪府知事左藤義詮の揮毫)がある。	豊中市庄本 1-7-9
4		新福寺 (萱野三平墓)	準義士萱野三平及び一族の墓と辞世の句『晴れゆくや 日ころ心の花曇り』が彫られた石碑がある。	豊中市二葉 町2-2-23
5	大阪市 きた エリア	浄祐寺 (右衛門七墓)	矢頭右衛門七教教兼(やとうえもしちのりかね)の供養墓と父長助教照(のりてる)の墓、顕彰碑「矢頭教兼碑」がある。	北区堂島 3-3-5
6		円通院墓地 (内蔵助の父墓)	大石内蔵助良雄(よししたか)の父権内良昭(よしあき)、祖父良欽(よししたか)と義士大石瀬左衛門の父八郎兵衛の墓がある。	北区兎我野 町7-8
7		浅野家蔵屋敷跡	1688年(元禄元年)の古地図によると中之島西信町にあたるが現在の常安橋北詰である。現大阪市役所の場所にあった「播州赤穂」は森家のもので浅野家ではない。	北区中之島 4丁目付近
8		淡路屋跡 (曾根崎新地)	当初から大石良雄に従ったが脱盟した橋本平左衛門と曾根崎新地の淡路屋遊女お初とが1701年(元禄14年)11月6日の夜に心中した。享年18。	北区堂島 3丁目付近
9		大石内蔵助 寓居跡	浄祐寺の西「梯起(ていちょう)寺…明治期には所在せず」裏にありと伝えられている。	福島区福島 1-4付近
10	大阪市 なか エリア	大手橋 (旧 思案橋)付近	「義侠 天野屋利兵衛之碑」「仮名手本忠臣蔵・十段目」の『天河屋義平は男でござる』の舞台の地である。	中央区 大手通3
11		長久寺 (原惣右衛門墓)	義士原惣右衛門ほか一族の墓がある。	中央区谷町 8-2-49
12		薬王寺 (天川屋利兵衛墓)	義士大高源五(吉良の在邸日を確認した人物)と天川屋利兵衛(天野屋利兵衛のモデルの一人)の墓がある。	中央区中寺 1-3-3
13		福泉寺 (堀部安兵衛墓)	義士堀部弥兵衛金丸(あきさね)、養子の安兵衛武庸(たけつね: もう一つの敵討高田馬場の中山安兵衛)の合墓がある。	中央区中寺 1-1-36
14	竹本座 『仮名手本忠臣蔵』	1748年(寛延元年)竹本座で人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』が初演された。	中央区 道頓堀1-8	
15	大阪市 みなみ エリア	吉祥寺 (四十七士の墓)	浅野家の菩提寺。内匠頭(たくみのかみ)の墓と大石親子、周囲玉垣に四十四士の墓(俗名、法号、享年)を刻む。毎年12月14日に「義士祭」が行われる。大戦により義士木像や長矩筆「万松山」の扁額、移築の赤穂藩蔵屋敷の門は焼失した。	天王寺区六万 体町1-20
16		青蓮寺 (竹田出雲墓)	『仮名手本忠臣蔵』『双蝶々曲輪日記』『菅原伝授手習鑑』などの傑作を書いた二代目竹田出雲と一族の墓がある。	天王寺区生玉 寺町3-19
17		観音寺 (義士木像)	浅野内匠頭長矩、四十七士のほか萱野三平、天野屋利兵衛など51体の木像が伝わっていたが今次の戦災で焼失した。	天王寺区逢阪 2-6-7
18	その他 エリア	大阪市立 中央図書館	宝永5年(1708年)に成立した『播磨相原(すぎはら)』は、大阪生まれの浮世草子作者・都の錦が赤穂浪士討ち入りを講談風に描いた作品で、現在に伝わる忠臣蔵の原型となった。	西区北堀江 4-3-2
19		一運寺 (大石親子と寺坂墓)	大石内蔵助良雄、主税良金(よしかね)と寺坂吉右衛門信行(のぶゆき)の墓がある。	住吉区住吉 2-6-23
20		心願寺 (村松喜兵衛墓)	義士村松喜兵衛(子の三太夫とともに親子で義挙に参加)の墓がある。	門真市下島町 14-33
21		靱呂岐神社 (子孫寄進鳥居)	村松喜兵衛四代目の子孫寄進の鳥居がある。	寝屋川市木屋 町10-25
22		郡山宿本陣 (椿の本陣)	刃傷事件の前年の1700年(元禄13年)5月16日に浅野内匠頭長矩の宿泊記録と大石良雄の切腹二日前の書がある。	茨木市宿川原 3-10

余裕があれば大阪市《きた》《なか》《みなみ》を組合して探訪可能



《北摂エリア》主に箕面市、豊中市を中心とした忠臣蔵ゆかりの地…………… 4

《北摂エリア》付近案内図（忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊）…………… 5

《大阪市きたエリア》主に北区、福島区を中心とした忠臣蔵ゆかりの地…………… 6

《大阪市きたエリア》付近案内図（忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊）…………… 7

《大阪市きたエリア》浄祐寺境内案内図（忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊）… 8

《大阪市きたエリア》浄祐寺関連史跡の変遷…………… 9

《大阪市なかエリア》主に中央区を中心とした忠臣蔵ゆかりの地…………… 10

《大阪市なかエリア》付近案内図（忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊）…………… 11

《大阪市なかエリア》大手橋付近案内図（忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊）… 12

《大阪市なかエリア》「義侠 天野屋利兵衛之碑」の変遷…………… 13

《大阪市みなみエリア》主に天王寺区を中心とした忠臣蔵ゆかりの地…………… 14

《大阪市みなみエリア》付近鳥瞰図（忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊）…………… 15

《大阪市みなみエリア》吉祥寺境内案内図（忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊） 16

《大阪市みなみエリア》吉祥寺関連史跡の変遷…………… 17

《その他エリア》主に地域的に分散している忠臣蔵ゆかりの地…………… 18

《その他エリア》付近案内図（忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊）…………… 19

《その他エリア》一運寺境内案内図（忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊）…………… 20

《その他エリア》一運寺関連史跡の変遷…………… 21

寺坂吉右衛門、矢頭右衛門七、萱野三平、天野屋利兵衛の墓…………… 22

《大阪市みなみエリア》吉祥寺義士墓の変遷…………… 24

コラム 吉良上野介も浅野内匠頭も二度目の経験だった

吉良上野介



吉良邸跡保存会蔵

松の廊下の刃傷事件の3年前1698年（元禄11）年に同じような暗殺未遂事件に吉良上野介はあっている。勅使饗応役に任命された津和野藩主亀井茲親が上野介に十分な賄賂を行わなかったことから上野介の嫌がらせを受け茲親が逆上したが津和野藩江戸家老多胡真蔭の機転で難なきを得た。また浅野内匠頭は1675年（延宝8年）に9歳で家督を継承し17歳で1回目の勅使饗応役を経験し、難なくこなしている。

浅野内匠頭



大石神社蔵

（萱野三平旧邸）

記念館「涓泉亭」

1701年（元禄14年）の浅野内匠頭の吉良上野介に対する刃傷事件の第一報を赤穂に伝えた早駕籠の使者の一人として当地萱野（かやの）郷出身の萱野三平が乗っていた。三平が途中、西国街道沿いの生家前を通過する当日には前日の3月17日に亡くなった母小満（こまん）の葬儀に出会うが、涙ながらに掌を合わせて赤穂へ注進した。赤穂城引渡しの後、討入りの義命に加わった三平は実家へ帰り、討ち入りの時期を待っていた。この折、父から新たな仕官の話があり、父に対する孝と、主君浅野内匠頭への忠との板挟みに悩み苦しんだ末、討ち入りの11ヶ月前の1702年（元禄15年）の主君の月命日の1月14日に三平は生家長屋門の一室で実父と内蔵助に遺書を残し、27歳を一期として波乱の準赤穂義士としての生涯を閉じた。

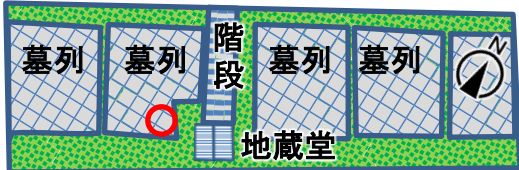
三平の萱野郷の生家は現在長屋門と土塀の一部が残され、自刃部屋などが当時のままとされており、現在この生家は著名な俳人だった彼の俳号涓泉（けんせん）を冠した萱野三平記念館「涓泉亭」として公開されている。彼の墓は記念館から南へ徒歩10分の所にある。



（萱野三平墓）

芝東西坊島墓地

墓碑銘は「萱野三平墓」。三平没後38年後の天文5年1740年（天文5年）の三平の姉の縁者が建立した。墓地内の位置は5つある墓列の西から2集団墓列目の地蔵堂そばの赤丸の位置。なお、墓地の位置は左ページにあるように箕面市立病院建設時旧芝東西坊島墓地から現在地に移設整備された。三平は『仮名手本忠臣蔵』では早野勘平として登場する。墓碑正面は生家の方角を向いて建てられている。



（萱野三平墓）

光国寺



左の写真の萱野三平墓の墓碑銘は「妙法陽光洞廊之墓」、顕彰碑は「萱野三平之碑」（当時の大阪府知事左藤義詮の揮毫）。三平の姉が光国寺に嫁いだ縁で供養墓が建立された。三平自刃の短刀が伝わる。



（萱野三平墓）

新福寺



新福寺は萱野家の菩提寺で萱野三平一族の墓がある。写真の大きい方の墓石が兄、小さい方が三平で墓碑銘は「妙法陽光洞廊居士」、右の顕彰碑は三平の辞世の句碑「晴れゆくや 日ころ心の花曇り」涓泉。



忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊 《北摂エリア》付近案内図



（右衛門七墓）
浄祐寺

境内の最奥に赤穂浪士矢頭長助と赤穂義士矢頭右衛門七（えもしち）父子の墓がある。赤穂城明け渡し後、一家は、堂島新地に借家したが、義盟に加入の父が病で寝たきりとなり、1702年（元禄15年）8月15日、父が死去し、右衛門七17歳のとき義盟を引き継ぎ、9月7日、里人に銭5貫文を借り、江戸へ出立しその後討ち入りに参加した。後刻、内蔵助より里人に5両の送金があった。長助の墓所は天王寺覚心院にあったが、同寺は改宗移転して浄祐寺となり現在に至っている。右衛門七の墓（供養塔）の戒名は「**刃擲振 叙信士**」、享年18歳（昭和己卯（14年）陸軍少将 戸波弁次 建碑）、顕彰碑「**矢頭教兼碑**」（明治纪元戊辰冬十一月建碑）は最初曾根崎奥之坊、文政年間に焼損し梅田東福寺、その後当寺に移転された。



泉岳寺蔵
（東京芝高輪）

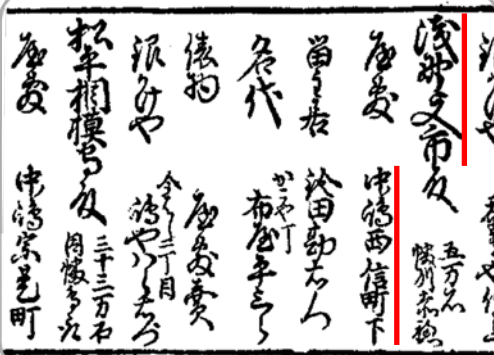
（内蔵助の父墓）
円通院墓地

同院には大石内蔵助の父、大石権内と赤穂義士大石瀬左衛門の父、八郎兵衛信澄の墓がある。権内は大石家の家督相続前の34歳で大坂赤穂藩蔵屋敷で病没。内蔵助が祖父良欽の養子となって大石家を相続した。写真は墓石ではなく案内標柱である。



浅野家
蔵屋敷跡

播州赤穂浅野家の蔵屋敷は、右図は1679年（延宝7年）刊の『懐中難波雀』の「諸大名御屋敷」中之島分に「浅野又市 屋敷中之島西新町下」とある。この「浅野又市」は9歳で家督を相続した内匠頭の幼名で、場所は現在中之島5丁目で常安橋北詰西側にあたる。浅野家がお家残断絶後は柳川藩の蔵屋敷となり明治維新後は長く住友倉庫があったが現状は大型駐車場となっている。なお、石高は5万石と記述されているが、松の廊下の刃傷事件時は5万3千石であった。幕末の地図などに記されている現大阪市役所の場所にあった「播州赤穂」は浅野家のあと永井家に続き赤穂藩主となった森家のものである。顕彰碑等はない。



（曾根崎新地）
淡路屋跡



赤穂浪士橋本平左衛門は、当初から大石良雄に従ったが、主君浅野長矩の刃傷事件の時は、僅か18歳の若さで、討ち入りを覚悟したその心情は不安定なものであった。そこで、その不安を紛らわせるために、大坂曾根崎新地に足を踏み入れ、淡路屋のお初という遊女と馴染みになり、お互いの将来を語り合う中になり、2人は心中して果てた。時に、討入り1カ月前の1701年（元禄14年）11月6日の夜であった。遊女と情死したため赤穂義士にも萱野三平のように準赤穂義士にもなれなかった。淡路屋の場所は『曾根崎心中』の天満屋お初と同じ曾根崎新地にあり現在はNTTテレパーク堂島となっている。

大石内蔵助
寓居跡

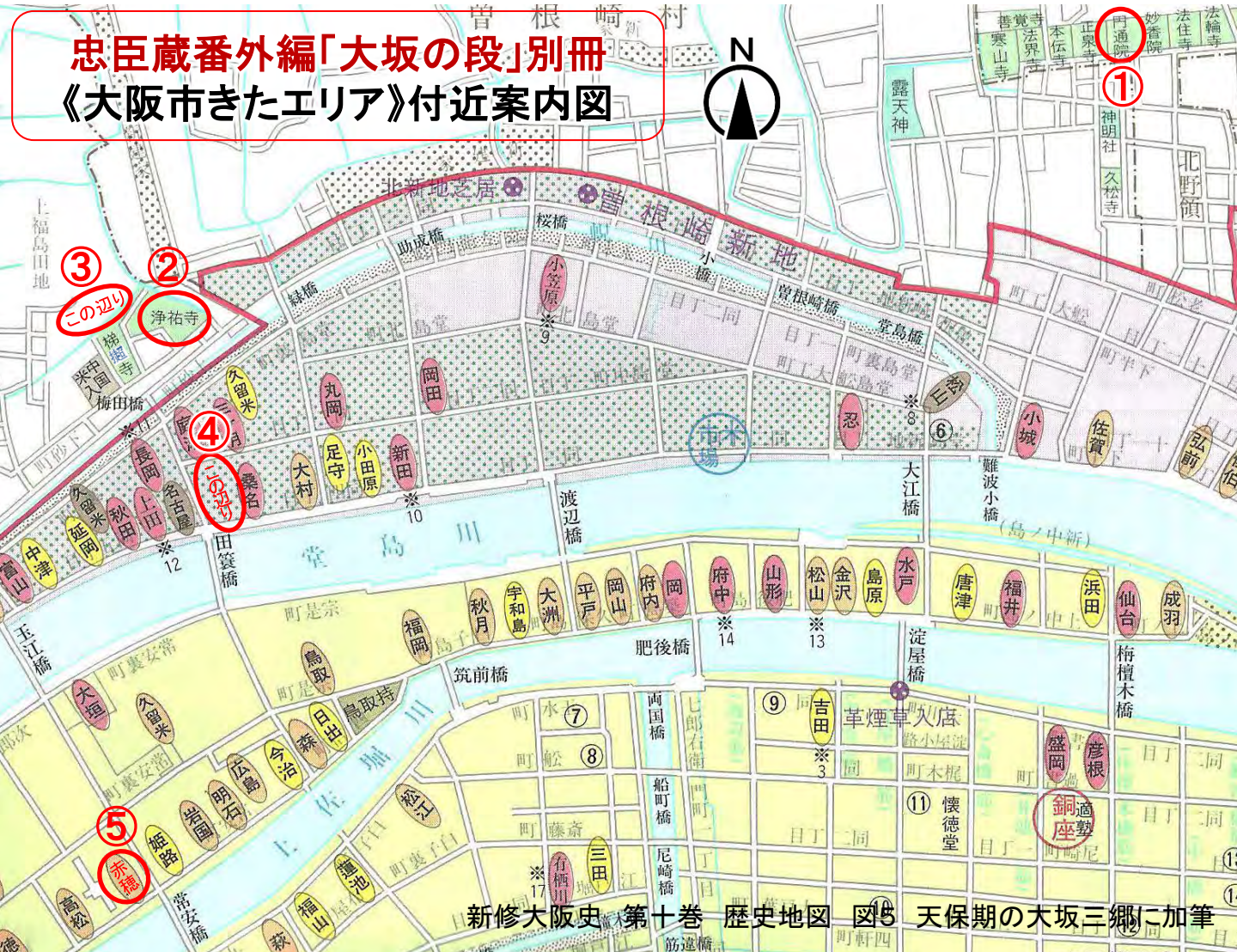


大石内蔵助寓居跡地
（国道2号線に面する）

暁鐘成著の『撰津名所図会大成』に「大石良雄寓居趾 浄祐寺の西、梯超寺裏にあり、伝云、此所、原天野屋利兵衛所持のざしきなりし」との記載あり。赤穂城明け渡し後の大石の大坂での寓居となった。国道2号線に面している。



忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊
《大阪市きたエリア》付近案内図



新修大阪史 第十巻 歴史地図 図5 天保期の大坂三郷に加筆

- ①**円通院墓地** 円通院の道を隔てた旧正泉寺の跡は現円通院の墓地で義士の大石内蔵助の父と大石瀬左衛門の父の墓がある。
- ②**浄祐寺** 義士の矢頭右衛門七の墓がある。詳細は8頁『忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊 浄祐寺境内案内』参照のこと。
- ③**大石内蔵助寓居跡** 天野屋利兵衛の所持の座敷で内蔵助赤穂退居の後しばらく居住したと伝わるが現在それを示す表示なし。
- ④**淡路屋跡** 討入りの義盟に加入したが脱盟した橋本平左衛門と心中したお初が囲われていた曾根崎新地の淡路屋の場所。
- ⑤**浅野家蔵屋敷跡** 常安橋の北詰に赤穂藩浅野家蔵屋敷があった。お家断絶後は幕末まで柳川藩立花家蔵屋敷となった。

堂島は当初、遊所として栄えたが、米市場に近いことから蔵屋敷が進出していった。堂島川の北にある蜷川は明治末の北の大火の瓦礫で埋められ今はない。

《浄祐寺関連史跡の変遷》

矢頭長助墓

矢頭右衛門七の父長助は1702年(元禄15年)に亡くなり、天王寺の覚心院に葬られたがその後無縁で荒れて果てていたが、60年後の1762(宝暦12年)讃岐高松藩士河田正休が高松の儒学者菊池武賢に撰文を依頼し建立したのが現存する墓碑である。墓碑銘は「矢頭長助之墓」。享年48歳。

矢頭長助墓

同寺は改宗移転して上福島(現北区堂島)の浄祐寺となり 現在に至っている。
その後の1909年(明治42年)のキタの大火で同寺も被災したが墓碑は無事であった。

矢頭右衛門七墓

同墓は供養塔で戒名は「刃擲振劔信士」。享年18歳で(昭和己卯(14年)に陸軍少将 戸波弁次により建碑された。

三基の墓

昭和20年(1945年)3月14日の大阪大空襲により浄祐寺の堂宇は全焼したが墓は一部焼損したのみで今日に伝わっている。

新建

覚心院

矢頭長助墓

新建

奥之坊

矢頭教兼(右衛門七)碑

矢頭教兼碑

曾根崎奥之坊(梅田墓にあったか?)に建碑される。

矢頭教兼碑

文政年間(1818年~1830年)に曾根崎奥之坊の頭彰碑が火災で焼損し、北区梅田町(現大深町、梅田1~3)の東福寺別院に「明治紀元戊辰冬十一月」建碑、すなわち明治元年に浪華の儒者河野逸が撰文し小寺静が揮毫した。

再建

東福寺

矢頭教兼(右衛門七)碑

移転

浄祐寺

矢頭長助墓

移転

浄祐寺

矢頭教兼(右衛門七)碑

矢頭教兼碑

1909年(明治42年)のキタの大火により東福寺は被災し浄祐寺に移転させた。

新建

浄祐寺

矢頭右衛門七墓

今次の空襲で被災

浄祐寺

矢頭右衛門七墓

矢頭長助墓

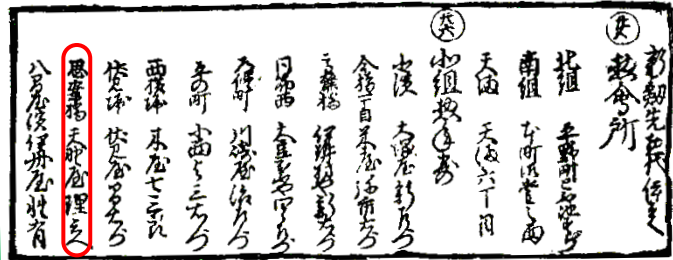
矢頭教兼(右衛門七)碑

現在に至る

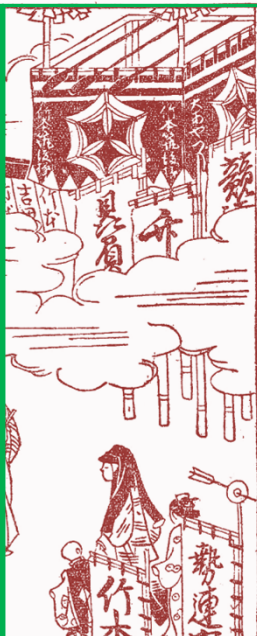


(旧思案橋)付近
大手橋

下図は1679年(延宝7年)刊の『懐中難波雀』の「北組惣年寄」の中に「思案橋天野屋理兵へ(衛)」とある。天野屋利兵衛(1661~1727年)は、思案橋(現 大手橋)東詰め北側の「内平野町濱内、内淡路町通南」の角屋敷に「表十五間半奥行凡十六間」の約245坪近い大店を構えていたと伝わっている。屋号を天野屋と称し、多くの大名屋敷の御用商人として相当繁栄していた。なお、この天野屋と赤穂藩、赤穂義士とは一切関係がなかった。



『仮名手本忠臣蔵』
竹本座



討ち入りから数えて47年後の1748年(寛延元年)に、ここ竹本座で人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』が『太平記』の世界に移し替えて初演された。吉良上野介を高師直、浅野内匠頭を塩冶(えんや)判官、大石内蔵助を大星由良助、萱野三平を早野勘平、寺岡平右衛門を寺坂吉右衛門として登場し、庶民は誰が誰か理解していた。図は『竹豊故事』(早稲田大学演劇博物館所蔵)より竹本座の部分。

(原惣右衛門墓)
長久寺



赤穂義士の原惣右衛門は、大石内蔵助(1500石)、片岡源右衛門(350石)に次ぐ300石扶持の高給の足軽頭で、刃傷事件時は江戸詰めまで前後処理を機敏に行った。墓は惣右衛門の長女・琴(1716年(享保2年)没)との合墓で戒名は「惣右衛門…刃峰原元辰/琴…妙孝婦原氏」享年56歳。一族の墓も同寺にある。なお、赤穂義士の岡嶋八十右衛門は実の弟である。建墓は琴の子・田中常沢による。なお、惣右衛門は江戸城での刃傷事件を知らせる萱野勘平の第一便の急使に続く、第二便の急使として早駕籠で浅野長矩切腹の報を高齢を押して赤穂へ知らせた。

(天川屋利兵衛墓)
薬王寺



『天野屋利兵衛は男でござる』の台詞で有名な天野屋利兵衛は人形浄瑠璃、歌舞伎や落語では天川(河)屋義平、浪曲や講談では天野屋利兵衛として登場する。当寺には天野屋利兵衛のモデルの一人、天川屋理兵衛の墓がある。この人物は内淡路町の商人で代々町年寄りを勤めていたが赤穂藩、赤穂義士とは一切関係がなかった。墓石の戒名は「妙法宗利日貞霊」。行年57歳。また、赤穂義士で俳人でもあった大高源吾の墓も伝わっている。この墓は天川屋理兵衛の子孫の方が建碑したもので、戒名は「刃意一叙信士」。享年32歳。同寺には江戸時代に活躍した多くの歌舞伎役者の墓も伝わっている。

(堀部安兵衛墓)
福泉寺



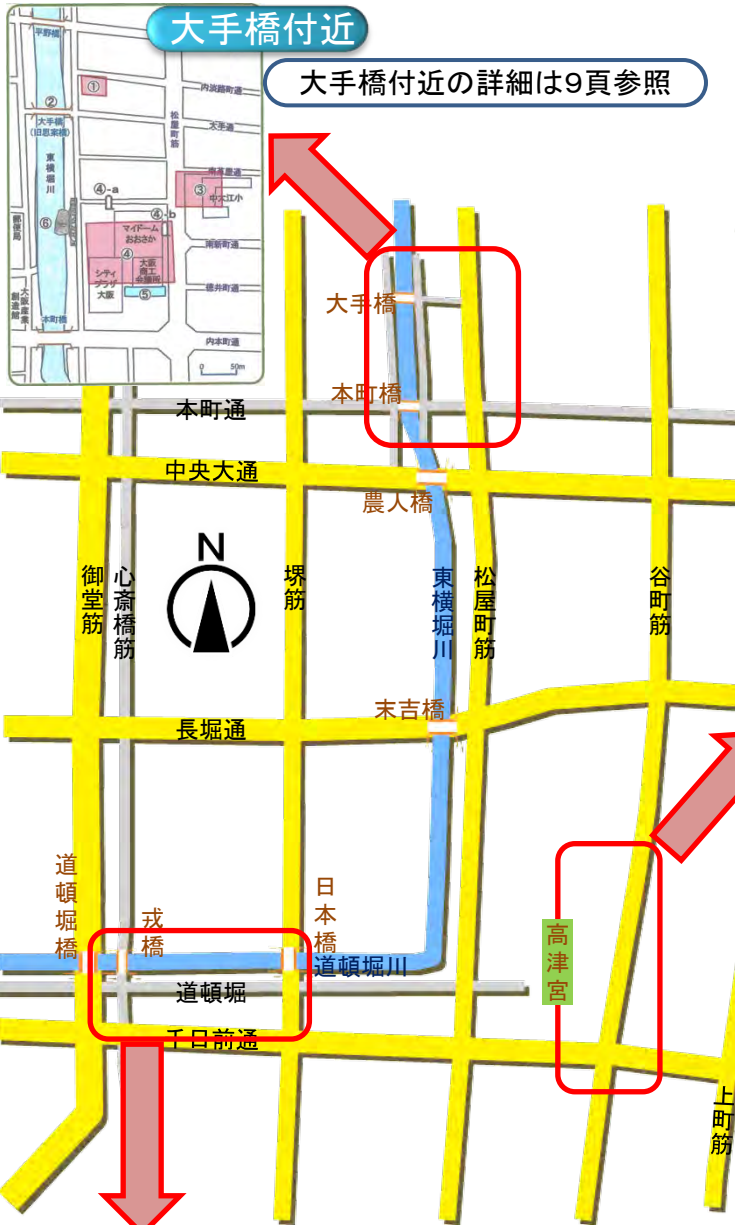
同寺には赤穂義士の堀部弥兵衛とその婿養子の赤穂義士の堀部安兵衛との合墓が伝わっている。安兵衛は「高田の馬場の決闘」の助太刀で名を馳せた剣客・中山安兵衛で、評判を伝え聞いた堀部弥兵衛が養子縁組を願い出たもので、その後娘婿になった。墓標には中央「墓 釈妙勝信女」、右『孫兵衛 釈宗香信士』、左「安兵衛 釈宗亀信士」と刻まれ、周りに複数の戒名が刻まれている。事件から約100年後の「文化四丁卯稔十一月中旬建之」(1804年)に堀部の縁者を名乗る「葎屋松女」により建墓された。享年は弥兵衛が77歳で義士の中で最年長、安兵衛が34歳で生涯二度の敵討を経験した。

忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊 《大阪市なかエリア》付近案内図

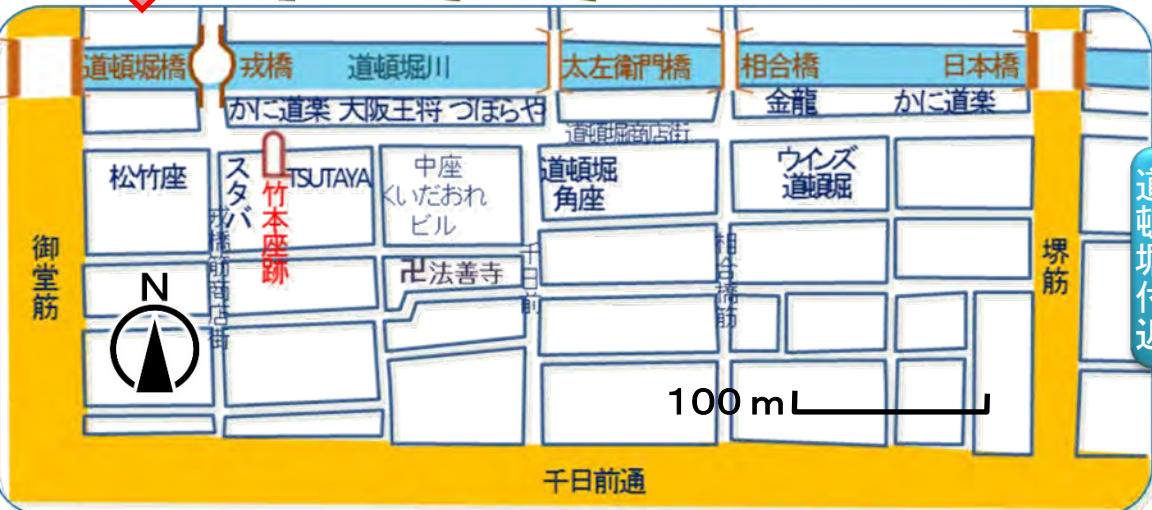
中寺付近は寺院が集積している

大手橋付近

大手橋付近の詳細は9頁参照



中寺付近





⑥

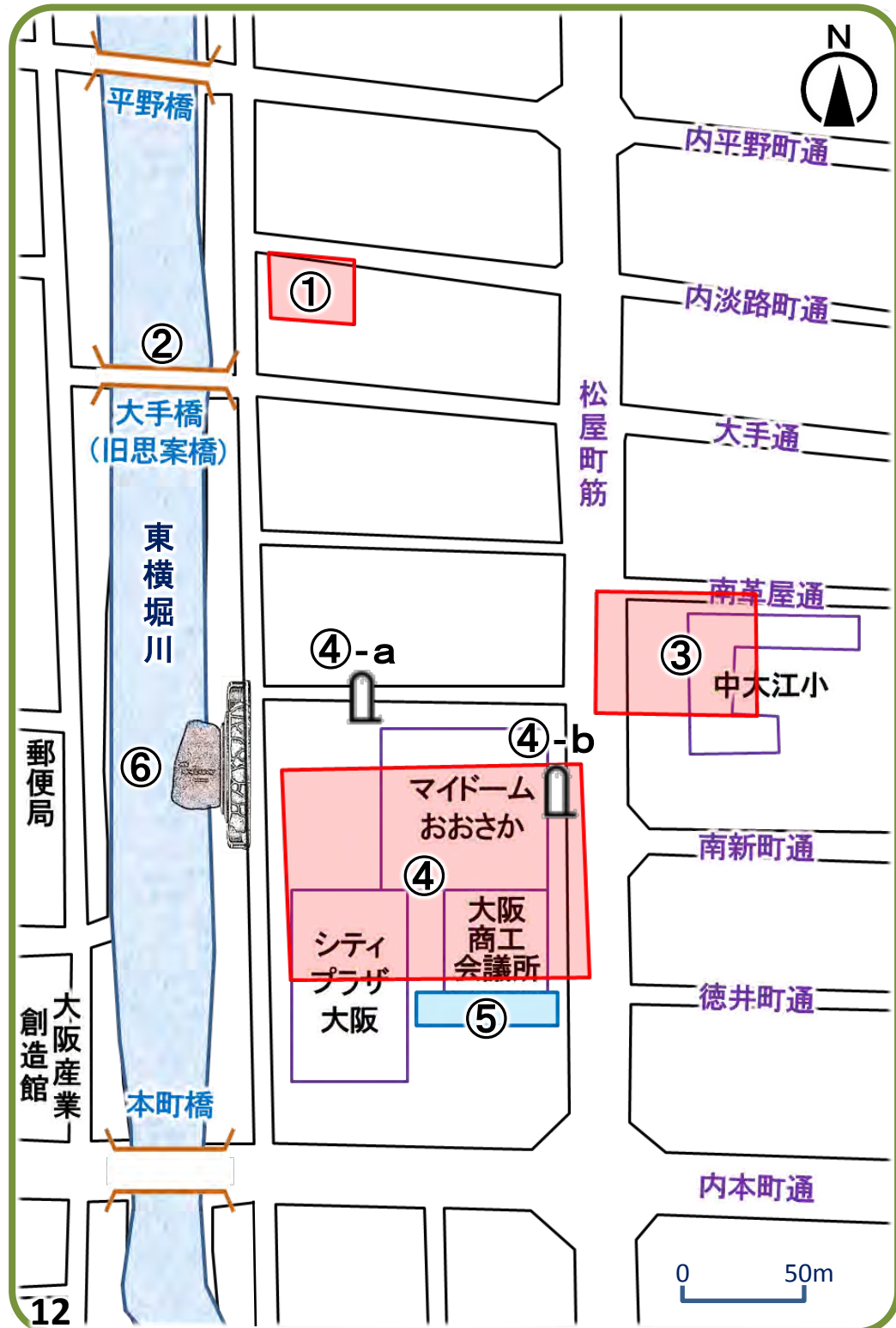
**忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊
大手橋(旧 思案橋)付近案内図**

- ①天野屋利兵衛屋敷 間口28m、奥行25m(212坪)の角屋敷の本店であった
- ②大手橋 江戸時代は思案橋と称した

- ③牢屋敷
- ④西町奉行所址 赤穂事件当時は京橋口にありこの場所にはなかった



- ④-a
- ④-b
- ⑤若宮商工稲荷神社 西町奉行所内の若宮稲荷神社と商工稲荷神社を合祀した
- ⑥義侠 天野屋利兵衛之碑 昭和15年に利兵衛の屋敷に近い元西町奉行所内の若宮稲荷神社に建碑され、その後現在地に移転した



《「義侠 天野屋利兵衛之碑」 関連史跡の変遷》



商工稲荷神社



若宮稲荷神社

若宮稲荷神社
1583年(天正11年)
豊臣秀吉が大坂城築城にあたって奉祀された。

若宮稲荷神社
1724年(享保9年)
京橋口の大坂西町奉行所が妙知焼により本町橋東詰の内本町橋詰町に移転。奉行所内に若宮稲荷神社も設置される。

若宮稲荷神社
明治維新後以下の施設が同地に順次建設される。
・初代大阪府庁
・府立大阪博物館
・大阪府立商品陳列所
・重建懐徳堂
・国際見本市会館(大阪府立貿易館)
・マイドームおおさか
1894年(明治27年)
府立大阪博物館の鎮守神として永世奉祀される。

「義侠 天野屋利兵衛之碑」
1939年(昭和14年)
内閣総理大臣侯爵近衛文麿の揮毫による碑で裏面に頼山陽の父頼春水撰の天野屋利兵衛傳が刻まれているが戦後に裏面碑文の中央部が削除されている。

「義侠 天野屋利兵衛之碑」
1965年(昭和40年)
商工会議所移転準備のため碑をマイドームおおさか西側東横堀川河川緑地に移動

商工稲荷神社
1879年(明治12年)
大阪商法会議所(現大阪商工会議所)の初代会頭の五代友厚が大阪の商工業発展のため勧請、場所は東区(現中央区)高麗橋3丁目にあたる。

商工稲荷神社
1879年(明治24年)
大阪商業会議所へ改組するとともに北区堂島3丁目に移転。

商工稲荷神社
1954年(昭和29年)
大阪商工会議所へ改組。

商工稲荷神社
1965年(昭和40年)
商工会議所が1971年(昭和46年)に中央区本町橋2丁目に移転するにともない建設用地内の若宮稲荷神社と合祀。

新建



若宮稲荷神社

西町奉行所移転



若宮稲荷神社

明治維新後



若宮稲荷神社

建碑



若宮稲荷神社



合祀



商工若宮稲荷神社

移動



義侠 天野屋利兵衛之碑

現在に至る



現在の裏面碑文部分

（四十七士の墓）
吉祥寺



吉良邸討ち入りの義挙に参加した赤穂義士の一人寺坂吉右衛門は、討入り後、大石内蔵助の特命を帯び浅野内匠頭の奥方瑤泉院に本懐の旨を報告し、本家の広島浅野家へも事の仔細を報告後、それぞれの義士の家族などに活躍を報告するために、東は宮城県、西は鹿児島県に出向いた。また、吉右衛門は江戸では幕府に遠慮して建碑できないため、四十六士の遺髪、遺爪、鎖帷子等に銀10両を添えて浅野家の大坂での菩提寺であった吉祥寺に義士たちの冥福のため建碑を依頼した。現在、中央に浅野内匠頭の五輪塔、向かって右側に内蔵助、左側に子の主税(ちから)の笠塔婆、その周りには残る四十四士の戒名と行年を刻んだ玉垣が取り囲んでいる。赤穂四十七士の墓1739年(元文4年)に建立、赤穂四十七士の討ち入り姿の群像は2002年(平成14年)12月の義士討ち入り300年を記念して建立、大石内蔵助の座像は2004年(平成16年)に建立されたもの。なお、写真は本懐を成し遂げた12月14日に合わせて実施される義士祭当日のもの。



（義士木像）
観音寺

天野屋利兵衛から四代目の当主が菩提寺の住吉の龍海寺に赤穂義士四十七士の墓を建立し、赤穂義士など五十一体(義士と浅野内匠頭、萱野三平、天野屋利兵衛など)の木像も寄進し寺の境内にお堂を建てて祀った。しかし明治の初めに廃寺になり、墓は崩され辛うじて大石親子と寺坂の三基のみ住吉の一運寺に移され、木像は一旦堺の素封家の手に渡り、のち茶臼山の観音寺に移されたが今回の戦災で焼失した。同寺の本堂前に「四十七義士木像」の道標が残るのみである。下図左の写真は『天野屋利兵衛傳』(昭和15年刊)所載の「茶臼山観音寺義士木像」で下段向かって右端为天野屋利兵衛像である。



（竹田出雲墓）
青蓮寺



江戸中期の浄瑠璃作者で人形浄瑠璃竹本座の座元で青年時代から近松門左衛門に師事し、『仮名手本忠臣蔵』『双蝶々曲輪日記』『菅原伝授手習鑑』(いずれもが合作)などの傑作を書いた二代目竹田出雲とその一族の墓がある。墓は宝篋印塔(ほうきょういんとう)の合墓で墓碑銘「文明院松立頭居士」。享年は65歳。これらの墓は元々は生国魂神社の神宮寺であった法案寺の生玉十坊の一つ遍照院にあったが、明治維新以後「神仏分離令」で法案寺が分離され、遍照院と医王院が併合し青蓮寺として、現在地に墓と共に移転した。なお、生国魂神社には現在でも境内社浄瑠璃神社がある。

天王寺七坂や有名
寺社も合わせて探索

忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊
《大阪市みなみエリア》付近鳥瞰図



- ① 吉祥寺 (詳細は16頁)
- ② 青蓮寺
- ③ 観音寺
- ④ 観音寺道標 (本堂前と別物)

日想観
南北に連なる上町台地の西側は鎌倉時代は松家町筋あたりまで大阪湾が迫り、太陽が海に沈むのが良く見えました。ここに新古今和歌集』の撰者の一人藤原家隆が庵を結び『夕陽(せきよう)庵』と名付けました。家隆(かりゅう)塚は藤原家隆の墓と伝えられています。また、四天王寺の西門が極楽の東門として信仰され、一心寺は法然上人日想観(夕陽の中に極楽を拝む)の寺です。

天王寺 地下鉄駅名
六万 交叉点名
 記念碑

ちぎりあれば
難波の里に
やどり来て
波の入り目を
おがみるかも



①

忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊 吉祥寺境内案内図

①吉祥寺山門

黒白の段だら模様
の築地塀

②大石内蔵助の座像

台座に「全機透脱 内蔵助良雄」

③赤穂義士石像

四十七士の勇姿

④赤穂義士墓所

浅野内匠頭と
四十七士の墓



万松山吉祥寺境内略図



②



④



③

《吉祥寺関連史跡の変遷》



吉祥寺

藤堂伽藍	山門	扁額 「万松山」	浅野内匠頭墓	四十七士墓 吉右衛門墓	四十六士木像	寺坂吉右衛門木像	菅野三平木像	四十七士石像	大石内蔵助座像
------	----	-------------	--------	----------------	--------	----------	--------	--------	---------

1630年 (寛永3年) 創建、1711年 (正徳元年) に再建。

開創

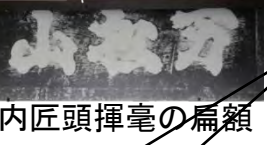
揮毫

刃傷

切腹

順次建立

改易



1701年 (元禄14年) 赤穂藩改易後、浅野家蔵屋敷門を移築した。

蔵屋敷門

浅野内匠頭墓

四十七士墓
吉右衛門墓
四十六士墓

四十六士木像
寺坂吉右衛門木像
菅野三平木像



何度か大きな災害に遭り、1916年 (大正5年) には火災により全焼、1925年 (大正14年) に再建。しかし昭和20年 (1945年) 3月14日の大阪大空襲により全焼。

今次の空襲で被災

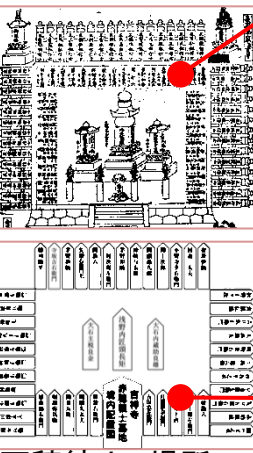
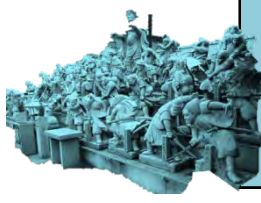
2002年 (平成14年) 討入り三百年に建立。

新築

縮小移転

建立

藤堂伽藍	山門	扁額 「万松山」	浅野内匠頭墓	四十七士墓 吉右衛門墓	四十六士墓	大石内蔵助座像
------	----	-------------	--------	----------------	-------	---------



面積縮小、場所は奥から山門近くに、配列もコの字形から口の字形に

現在に至る

本懐を成し遂げた12月14日に合わせて毎年「義士祭」が催される。

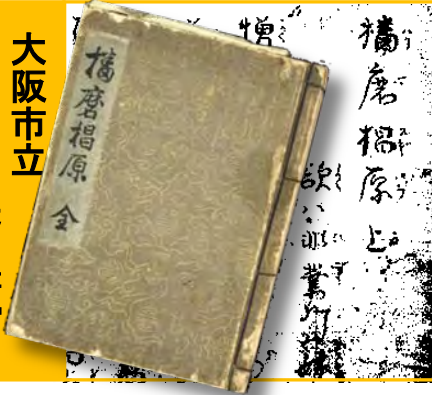
天野屋利兵衛から四代目の当主が菩提寺の住吉の龍海寺に赤穂義士四十七士の墓を建立し、赤穂義士など五十一体(義士と浅野内匠頭、萱野三平、天野屋利兵衛など)の木像も寄進し寺の境内にお堂を建てて祀った。しかし明治の初めに廃寺になり、墓は崩され散逸し、辛うじて大石親子と寺坂の三基のみ当寺の住職が引き取り。墓地に並べていたが昭和15年に三基を現在の場所に基壇を築き整備した。墓の墓誌は左から「寺坂吉右衛門」「忠誠院刃空浄剣居士」「刃上樹剣信士」で大石親子には俗名と享年が併記、内蔵助には没年月日も記載。木像の方は一旦堺の素封家の手に渡り、のち茶臼山の観音寺に移されたが今次の戦災で焼失した。



(大石親子と寺坂墓)
一運寺

大阪市立
中央図書館

増
播磨相原
全



討入りから4年後の1706年(宝永3年)には、赤穂事件に題材をとり、『太平記』の世界に仮託し塩冶判官や大星由良之介が登場する近松門左衛門作の人形浄瑠璃『碁盤太平記』が竹本座で上演されているが、本格的忠臣蔵物は討入りから6年後の1708年(宝永5年)に成立した『播磨相原(すぎはら)』を待たなければならない。大阪生まれの浮世草子作者・都の錦が赤穂浪士討ち入りを講談風に描いた作品で、現在に伝わる忠臣蔵の原型となった。この都の錦が1711年(宝永8年)に著(写)した自筆本『播磨相原』上中下3巻1冊が平成23年(2011年)、300年ぶりに大阪で発見され、所有者の方から大阪市立中央図書館へ寄贈された。なお、『播磨相原』の『相原』は播磨名産和紙の杉原紙で播磨の名物、即ち忠臣蔵を揶揄した題名である。

(村松喜兵衛墓)
心願寺

玄関
供養碑



門真市下島町の心願寺の前庭にある供養碑と寝屋川市木屋の鞆呂岐神社の奥宮の石鳥居の右石柱中程に、同文の「播州赤穂城主、浅野長矩家中、四七人之内、村松喜兵衛四代之孫、村松喜兵衛源尚次」と刻まれている。心願寺の供養碑は元寝屋川市木屋の真宗道場にあったが明治の廃仏毀釈で伽藍と一緒に引き取られたもので神仏混合の名残。この村松喜兵衛は赤穂義士でその子三太夫も赤穂義士。享年は其々63歳、27歳であった。三太夫には僧になった政右衛門という弟があり、その弟の孫が建立したもの。



奥宮鳥居
正面鳥居
(子孫寄進鳥居)

(椿の本陣)
郡山宿本陣



正式には「摂津郡山宿本陣」と言う。御成門(入口)に見事な椿の木があったため「椿の本陣」と呼ばれた。建物は1718年(享保3年)の火災で宿帳を除いた貴重な古記録とともに焼失した。残された宿帳に、赤穂城主・浅野内匠頭の宿泊記録が4回あり、最後は、刃傷事件の前年の1700年(元禄13年)5月16日の参勤御泊で、家来の片岡源五衛門らとともに宿泊し銀子貳枚(およそ一両半)を支払っている。これが最後の参勤交代となってしまった。また、「上段の間」の前面「継の間」には切腹二日前の大石良雄の書が掲げられている。見学には事前予約が必要であるが春と秋の一般特別公開時は特に予約はいらない。



④

忠臣蔵番外編「大坂の段」別冊 一運寺境内案内図

①赤穂義士墓所

大石親子と寺坂吉右衛門のみ

②①のうち寺坂吉右衛門の墓

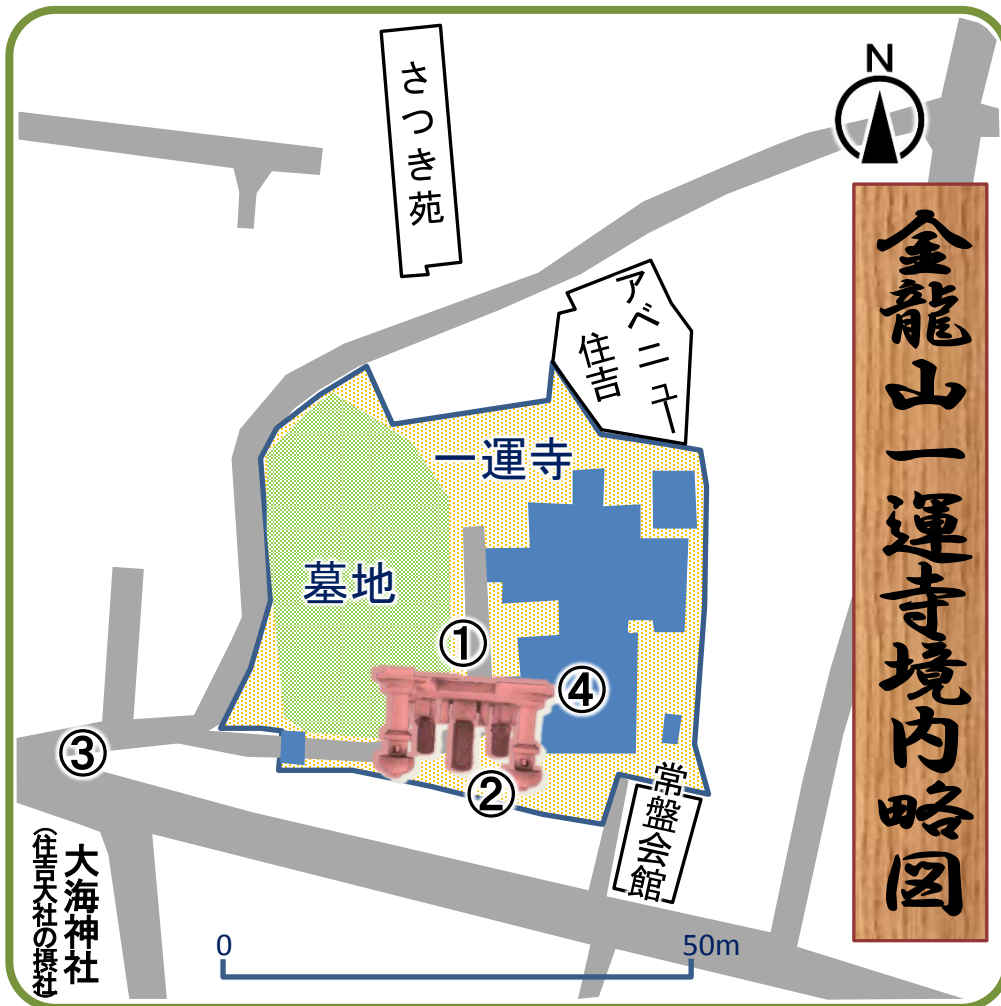
墓碑に「寺坂吉右衛門」

③一運寺参道

飛鳥への小径

④一運寺本堂

本尊に聖徳太子作の小さい阿弥陀様



20

一運寺参道



寺坂

大石内蔵助

主税

《一運寺関連史跡の変遷》

天野屋四代目奉納

龍海寺

四十七土墓				+ 四 4 七 人 七 木 土 像 木 像
吉寺 右坂 衛門 墓	四 十 四 土 墓	大 石 主 税 墓	墓 大 石 内 蔵 助	

住吉の一運寺の北西すぐの所にあった天野屋利平の菩提寺龍海寺に延享年間(1744-1748)に祀られる。

明治維新の際に廃寺

廃寺により、庭石、墓石などが破碎や散逸された。

三基のみ移転

時の一運寺の住職が見かねて右端にあった大石親子と左端の寺坂の三基のみを一運寺の墓地に移転した。

一運寺

四十七土墓		
吉寺 右坂 衛門 墓	大 石 主 税 墓	墓 大 石 内 蔵 助

移転

堺の素封家が自宅にお祀りした。

素封家

+ 四 4 七 人 七 木 土 像 木 像

基壇を設け移転

移転

観音寺

+ 四 4 七 人 七 木 土 像 木 像



戦災で焼失



現在に至る



家紋丸に二つ割菊



吉祥寺



吉良邸跡「本所松坂町公園」

赤穂義士唯一の生き残り
寺坂吉右衛門



吉祥寺の義士群像より

[寛文5年(1665年)—延享4年(1747年)]墓

享年83歳

	住 所	寺院名	宗旨	戒名	墓種	建立年	
1	東京都港区南麻布二丁目	曹溪寺	臨濟宗	節叡了貞信士	本墓	延享四年	1747年
2	東京都港区高輪二丁目	泉岳寺	曹洞宗	遂道退身信士	供養墓	慶応四年	1868年
3	宮城県仙台市泉区名坂	実相寺	曹洞宗	理海慈寶主	分骨墓		
4	静岡県賀茂郡西伊豆町	慈眼寺	臨濟宗	一相西円上座	分骨墓		
5	大阪市天王寺区六万体町	吉祥寺	曹洞宗	刃忠義劔信士	生前墓	元文四年	1739年
6	大阪市住吉区住吉二丁目	一運寺	浄土宗	寺坂吉右衛門	生前墓	延享時代	1744-48
7	兵庫県加東市家原	観音寺	曹洞宗	節叡了貞信士	供養墓	明治7年	1874年
8	兵庫県赤穂市加里屋	花岳寺	曹洞宗	遂道退身信士	供養墓		
9	島根県益田市遠田町	信行庵	浄土真宗		分骨墓		
10	島根県江津市黒松町	信行庵	浄土真宗	寺坂吉右衛門の墓	分骨墓		
11	福岡県北九州市八幡西区	真田増丸氏の墓		節叡了貞信士	供養塔	大正2年	1913年
12	福岡県八女市豊福	一念寺	浄土宗		分骨墓		
13	福岡県福津市津屋崎町	新泉岳寺	曹洞宗	遂道退身信士	分霊墓	大正二年	1913年
14	長崎県五島市久賀島	恵剣寺	曹洞宗		分骨墓		
15	鹿児島県出水市美原長町	共同墓地			分骨墓		



家紋横木瓜(五つ目)



図は萱野三平記念館「涓泉亭」パンフレットより
準赤穂義士 討ち入り前に自害した

萱野三平 享年27歳

(延宝3年(1675年)—元禄15年(1702年))墓

	住 所	寺院名	宗旨	戒名	墓種	建立年	
1	東京都港区高輪二丁目	泉岳寺	曹洞宗	刃道喜劔信士	供養墓	明和四年	1767年
2	大阪府箕面市萱野五丁目	共同墓地		陽光院道廊居士	本墓	元文五年	1740年
3	大阪府豊中市庄本一丁目	光国寺	浄土真宗	妙法陽光洞廊之墓	分骨墓		
4	大阪府豊中市二葉町二丁目	新福寺	日蓮宗	妙法陽光洞廊居士	生前墓		
5	福岡県福津市津屋崎町	新泉岳寺	曹洞宗	刃道喜劔信士	分霊墓	大正二年	1913年

「天野屋利兵衛は三人いた」

天野屋利兵衛 綿屋善右衛門 天川屋利兵衛



浪曲や講談 話のモデル 人形浄瑠璃や歌舞伎

天野屋利兵衛〔寛文元年(1661年) - 享保18年(1733年)]墓

綿屋善右衛門〔? - 宝永5年(1708年)]墓

天川屋利兵衛〔寛文元年(1661年) - 享保18年(1718年)]墓

	住 所	寺院名	宗旨	戒名	墓種	建立年	
1	東京都港区高輪二丁目	泉岳寺	曹洞宗	天野屋利兵衛浮図碑	供養墓	明治2年	1869年
2	京都市北区大將軍川端町	地藏院	浄土宗	法正院空營土育善士	本墓	享保12年	1727年
3	京都市下京区寺町通四条下	聖光寺	浄土宗	天野屋利兵衛の墓所	本墓	元文五年	1708年
4	大阪市中央区中寺一丁目	薬王寺	日蓮宗	妙法宗利日貞霊	本墓	享保三年	1718年
5	福岡県北九州市八幡西区	真田増丸氏の墓		天野屋利兵衛浮図碑	供養塔	大正2年	1913年



ちがい矢



泉岳寺



大林寺
(宝篋印塔)



浄祐寺



吉祥寺



吉祥寺の義士群像より

親に代わって義士になった

矢頭右衛門七 享年18歳

〔貞享3年(1686年) - 元禄16年(1703年)]墓

	住 所	寺院名	宗旨	戒名	墓種	建立年	
1	東京都港区高輪二丁目	泉岳寺	曹洞宗	刃擲振劔信士	本墓	明和四年	1767年
2	愛知県岡崎市魚町一丁目	大林寺	浄土宗	(宝篋印塔)	供養塔	元文五年	1740年
3	大阪市北区堂島三丁目	浄祐寺	日蓮宗	刃擲振劔信士	供養塔	昭和14年	1939年
4	大阪市天王寺区六万休町	吉祥寺	曹洞宗	刃擲振劔信士	供養墓	元文四年	1739年
5	兵庫県加東市家原	観音寺	曹洞宗	刃擲振劔信士	供養墓	明治7年	1874年
6	福岡県北九州市八幡西区	真田増丸氏の墓		刃擲振劔信士	供養墓	大正2年	1913年

愛知県岡崎市の「大林寺」の矢頭右衛門七の供養塔(宝篋印塔)は元禄16年2月4日に右衛門七が切腹時に介錯人を務めた水野家家臣・杉源助が建立したものの。

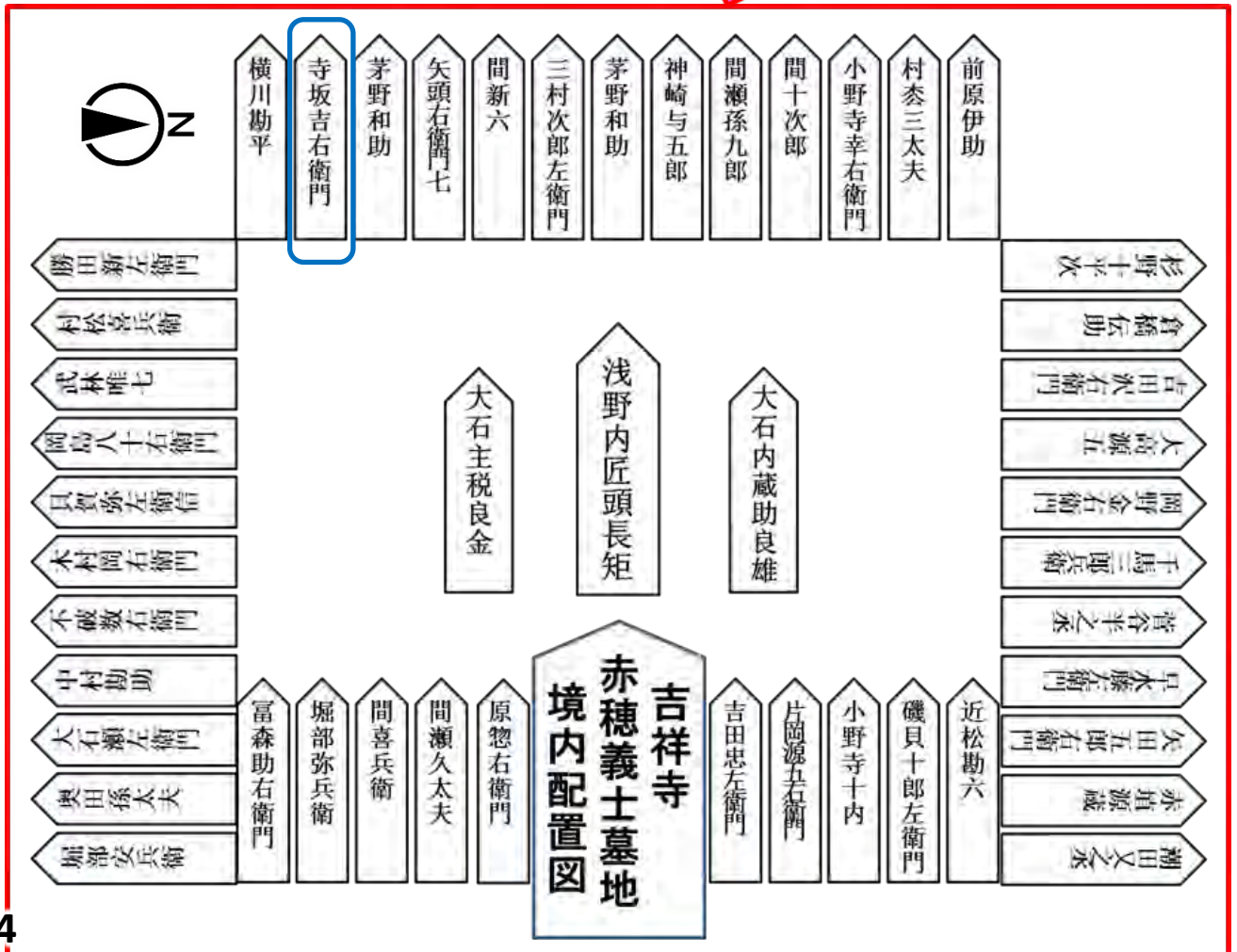
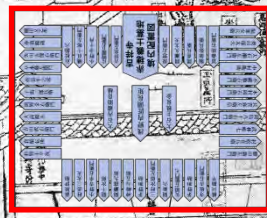
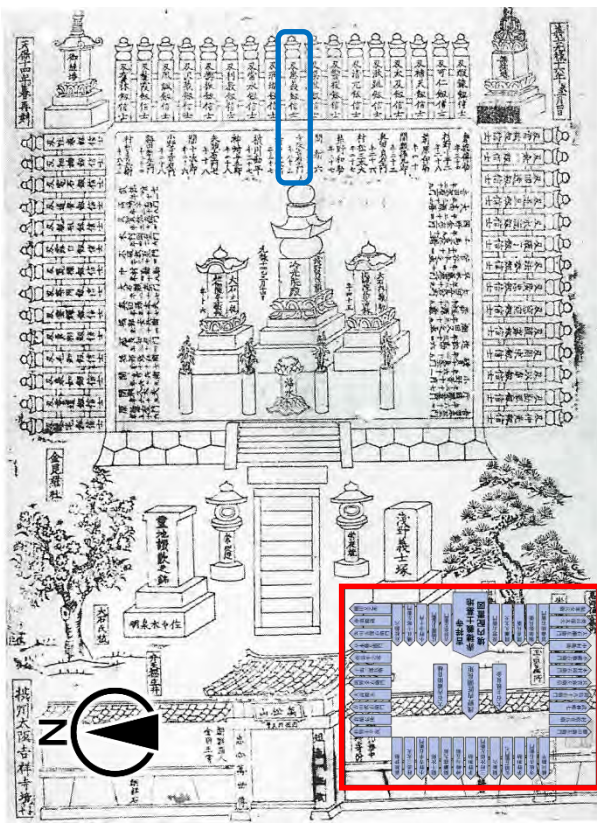
《吉祥寺義士墓の変遷》

左図は郷土研究『上方』の第108号の「赤穂義士号」より転載し一部加工した「赤穂四十七義士の墓図」で戦前の吉祥寺の様子が記録されている。山門の前は谷町筋で義士の墓は山門を入れて奥にある。また墓は中央に浅野内匠頭、向かって右に大石内蔵助、向かって左に大石主税、その周りの「コ」の字形に囲む玉垣に四十五士、ちなみに、四十七士の内、だだ一人生き残り、義士の甲いを依頼した寺坂吉右衛門の墓は浅野内匠頭の真後ろに位置している。

同図の赤囲いの位置は戦後、移築された「赤穂四十七義士の墓」の位置を示すもので、下図がその拡大図である。この図は現状を筆者が調査したもので中央の三基は元の位置関係で、その周りの玉垣の囲み方が「ロ」の字形に変更されている。基本的な並べ方は東京高輪泉岳寺と

同じく討ち入り後お預けとなり切腹した大名家ごとにグループ化されといふ。寺坂吉右衛門の墓は浅野内匠頭の真後ろから少しずれた位置に代わっている。

180度
回転



大阪市《きた》《なか》《みなみ》
を組合して探訪可能です。



No.	エリア名	史跡名	
1	北摂 エリア	記念館「涸泉亭 (萱野三平旧邸)	
2		芝東西坊島墓地 (萱野三平墓)	
3		法皇寺 (萱野三平墓)	
4		新福寺 (萱野三平墓)	
5	大阪市 きた エリア	浄祐寺 (右衛門七墓)	
6		円通院墓地 (内蔵助の父墓)	
7		浅野家蔵屋敷跡	
8		淡路屋跡 (曾根崎新地)	
9		大石内蔵助 寓居跡	
10		大阪市 なか エリア	大手橋 (旧 思案橋) 付近
11			長久寺 (原惣右衛門墓)
12			薬王寺 (天川屋利兵衛墓)
13			福泉寺 (堀部安兵衛墓)
14	竹本座 『仮名手本忠臣蔵』		
15	大阪市 みなみ エリア	吉祥寺 (四十七士の墓)	
16		青蓮寺 (竹田出雲墓)	
17		観音寺 (義土木像)	
18	その他 エリア	大阪市立 中央図書館	
19		一運寺 (大石親子と寺坂墓)	
20		心願寺 (村松喜兵衛墓)	
21		...	
22		...	



「忠臣蔵ゆかりの地」マップ

表のNo.欄の数字番号5～19
とマップ上の⑤～⑱の数字
は対応します。

大阪府立大学大阪検定客員研究員 平成27年度研究成果報告会でお配りした別冊『忠臣蔵番外編「大坂の段」ゆかりの地と人物巡り』の各ページに記載のコラムをスペースの都合で取りまとめ収容し、再編集したものです。

《北摂エリア》のコラム

コラム 萱野三平は涓泉と号する俳諧の“浅野家三羽鳥”の一人であった。他の二人は神崎与五郎則休(雅号:竹平)と大高源五忠雄(雅号:竹平)でどちらも赤穂四十七士として討ち入りに参加している。この内、大高源五は江戸では脇屋新兵衛と名乗り、吉良家出入りの茶人山田宗偏に入門して12月14日の吉良邸で茶会の情報を得た。墓は当資料10頁の薬王院にも伝わっている。

《大阪市きたエリア》のコラム

コラム 矢頭右衛門七が江戸へ出立の砌、里人に銭5貫文を借金、後日大石内蔵助が5両返金している。江戸時代は金(小判など)、銀(丁銀など)および銭(寛永通寶など)の三貨制で主に江戸では金貨、大坂では銀貨が基本通貨で庶民は銭貨であった。三貨の交換レートは日々変わりこのため両替商が栄えた。銭5貫文は1両1分に相当し1分は $\frac{1}{4}$ 両であった。大石の5両の返金は太っ腹である。

コラム 橋本平左衛門は矢頭右衛門七の父長助、岡野金右衛門の父包住、萱野三平と共に義盟に加わりながら志半ばで命を落した「中折の四士」と呼ばれている。1702年(元禄15年)7月15日のお初との心中事件は世に「蜷川心中」と喧伝された。享年は17歳。歌舞伎の早野勘平は橋本平左衛門と萱野三平の生き方と死に方をモデルとし、名前は赤穂四十七士の横川勘平に基づく。

コラム 矢頭右衛門七は、浅野内匠頭の松の廊下刃傷事件時は家督相続前の部屋住みの身分で、義盟に加わっていた父親長助の死後、大石内蔵助は彼の若さと残される母と妹たちを気遣い加盟を許さなかったが、不変の決意を酌み同士に加えた。討入り時、大石主税の16歳に次ぐ年少者で18歳であった。吉良邸では父親の戒名を記した紙片を兜頭巾に納め、武器は槍を持ち奮戦した。

コラム 浄祐寺の門前、曾根崎新地西入口に「編笠茶屋」と呼ばれる茶屋があった。江戸新吉原にも遊郭に入る客に、顔を隠すための編笠を貸した同名の茶屋であったため、こちらも同種の茶屋と考えられていたが、忘れ物の編笠を長く店頭に掲げていたため「編笠茶屋」と呼ばれたのが真相である。

《大阪市なかエリア》のコラム

コラム 竹本座の解説にある『竹豊故事』の図には竹本座の櫓(やぐら)が描かれている。この櫓は歌舞伎・人形浄瑠璃などの小屋の官許の印で木戸(入口)の上部に6尺(約2.5m)四方の木の格子を組み、三方に白く染め抜いた座紋の櫓幕を巡らし、5本の槍を横たえ(図は3本になっている)、一對の梵天(ぼんてん)が立てられている。幕の色は歌舞伎は紅(茜)色、浄瑠璃は紺色であった。

コラム 竹本座の北の道頓堀川に架かる戎橋は今宮戎の参道に当たるからの命名説が有力だが、人形浄瑠璃全盛期には「操橋」とも呼ばれた。また1867年(慶応3年)には幕府の命令で“戎”が中華思想の異民族に対するさげすむ言葉の東夷・北狄・西戎・南蛮に通じると一時に「永成橋」と改名されたが定着しなかった。竹本座は大西の芝居・筑後の芝居・戎座・浪花座と続き現在に至っている。

コラム ③の牢屋敷は町名より「与左衛門町牢屋敷」と呼ばれ東西町奉行に属する牢屋はこのみで、「天満の牢」、「松屋町牢屋敷」などとも呼ばれた。斬首刑はこの土壇場で行われ、遺体は舟で東横堀川、道頓堀経由で木津川口(難波島)まで運ばれた。市中引き回しはここから本町橋を西横堀川に突きあたり南へ道頓堀に突きあたり東へ日本橋を南に渡って千日前刑場のコースであった。

コラム 江戸時代、幕府は武家社会で起こった事件を芝居化することが禁止したが、明治政府は「忠臣蔵」を明治天皇への忠孝に読み替え、徳川家への否定に利用しようとした。早速、明治天皇は高輪泉岳寺に勅書と金一封が届けられ、有志による「義商天野屋利兵衛浮図」が建碑された。しかし戦後、進駐したGHPは逆に「忠臣蔵」の忠孝を否定し上図の「義侠碑」の碑文の一部が削られたりした。

大阪府立大学大阪検定客員研究員 平成27年度研究成果報告会でお配りした別冊『忠臣蔵番外編「大坂の段」ゆかりの地と人物巡り』の各ページに記載のコラムをスペースの都合で取りまとめ收容し、再編集したものです。

《大阪市みなみエリア》のコラム

コラム 思案橋は江戸時代、大坂城の正面追手口を出て追手筋を西へ錦町、折屋町、備後町と経て東横堀川を渡り船場へ通じる橋であったが、橋の西詰は十字路ではなく丁字路になっており北(右)の淡路町か南(左)の瓦町かどちらに行くか思案したことから命名。追手筋が大手通になったのは明治以降、大手橋という名前の鉄筋コンクリート橋が架かったのは1926年(大正15年)の事である。

コラム ②の青蓮寺にある二代目竹田出雲とその一族の墓は宝篋印塔となっている。この仏塔は宝篋印陀羅尼を納めたところからこの名称がつけられ、基壇、塔身とも正方形でその上に笠、相輪が載っている。笠には隅飾りがあるのが特徴で、塔身部分の四面に円形の月輪を陽刻し、中に梵字で金剛界四仏(東…阿闍、西…阿弥陀、南…宝生、北…上空成就)が其々刻まれている。

コラム 吉祥寺の山号は赤穂藩主浅野内匠頭が高輪泉岳寺の「萬松山」に因み「萬」を「万」にし「万松山」とした。山号揮毫の折、寺に適当な紙が無かったため和尚が小坊主に求めに行かすが待ちきれなかった内匠頭が寺にあった経机に直接「万松山」と揮毫し代々伝わったが先の戦災で揮毫の扁額や堂宇、義士の遺品、木造など灰燼に帰し残るものは内匠頭と赤穂四十七士の墓石のみとなった。

コラム 重大犯罪者の罪は父母、兄弟、妻子の三族連座が原則であったが、元禄になると男子の遺児だけが罰せられるようになった。しかし、1709年(宝永6年)綱吉の死により新将軍家宣は大赦を行い、赤穂浪士の遺児に対しても赦免や還俗が認められた。赤穂四十七士などの墓も黙認され、上演中止の義士物も時代や登場人物の設定を変えるなどの工夫で取締りの目を潜ることができた。

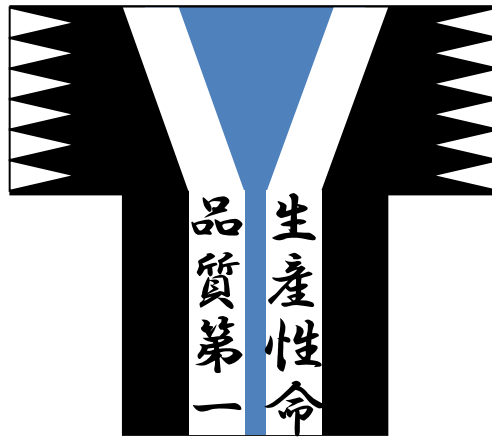
《その他エリア》のコラム

コラム 西国街道は、江戸時代における街道の一つ山陽道の別名としても用いられるが、通常は狭義の京の東寺口から西宮までの区間を指し山崎通とも呼ばれ参勤交代の大名が頻繁に往来した。間には山崎、芥川、郡山、瀬川、昆陽の5宿があり全長13里(52km)でほぼ国道171号が並行に走っている。郡山宿本陣から西へ1里と10町(約5km)で4頁の萱野郷の萱野三平の旧宅がある。

コラム 赤穂義士46名は討ち入り後肥後熊本藩の細川家、伊予松山藩の松平家、長門府中藩の毛利家、三河岡崎藩の水野家の4大名家へ預けられた。心願寺に墓のある村松喜兵衛も子の三太夫とともに討ち入りに参加しているが他にも大石親子、堀部親子、間兄弟など親子、兄弟での討ち入り参加者が多くあり、同じ大名家には親子、兄弟などの家族と一緒に預けないという方策がとられた。

コラム 一運寺の参道横の二差路の間の案内板に「飛鳥への小径(こみち)」とある。この路は日本書紀にある古代の「磯齒津路(しはつみち)」で、住吉津(すみのえのつ)から大和へと通じる海外の使節が通った国際ロードで一運寺も聖徳太子創建と伝えられることから太子ゆかりの飛鳥へ続くとも名付けられた。なお、磯齒津路は現在はもう少し南の長居公園通にほぼ沿った道に比定されている。

コラム 一心寺と安居神社の間にある天王寺七坂の一つ逢坂は、馬車馬が音をあげるほど急な坂だったと伝えられ、道幅も狭く、事故が多かった。1876年(明治9年)に茶臼山観音寺の住職が寄付を集めて坂を切り崩して緩やかにする工事を行った。明治末に市電の開通でほぼ現在の姿になった。



別冊『忠臣蔵番外編「大坂の段」
ゆかりの地と人物巡り』